

平成 25 年 9 月 18 日

秩父市議会議長 浅海 忠 様

生活産業委員長 新井 重一郎

生活産業委員会行政視察報告書

- 1 期 日 平成 25 年 7 月 2 日 (火) ～4 日 (木)
- 2 視察先 福岡県九州大学、大分県中津市、豊後高田市
- 3 参加者 委員長 新井 重一郎 委 員 金崎 昌之
委 員 竹内 勝利 委 員 荒船 功

4 視察目的

福岡県九州大学工学部応用力学研究所 「再生可能な自然エネルギーの活用」について

○ 事業の概要

国内における原子力発電所の事故、世界的には二酸化炭素削減目標を背景に、現在再生可能な自然エネルギーの開発が進んでいる。その一つが風力発電である。風エネルギーを集中させる革新的風力発電システム（レンズ風車）の開発で成果をあげている九州大学応用力学研究所を視察し、開発を行っている大屋教授に直接話を聞くことが出来た。風力発電にとって重要なことは、弱い風でも高出力がえられるシステムであること。そのために、開発されたのが「つば付デیفューザ風車」下の写真見られるように風車翼を囲むように取り付けられた「つば」が集風体となり風レンズの役割をはたし風車翼に流入する風速が増し、弱い風でも高効率で発電ができる。このシステムは 2008 年文科省科学技術賞を受賞し特許取得も行った。更に、風レンズを用いた革新的中型・小型風車システム導入に関する技術開発が H 2 2 ～ 2 4 年度の環境省委託事業にも指定されている。更に、次に



目指すものは、洋上に設置した浮体上に風力、太陽光、潮力、波力等のエネルギー源を利用した総合的発電システムを備えたファームとのことである。

大分県中津市

「九州周防灘地区定住自立圏共生ビジョン」に基づくコミュニティバス運行事業について

○ 市の概要

中津市は、大分県の最北端に位置し、東は宇佐市、北西は福岡県の東部地域に接し、北東は周防灘に面している。面積は491.17km²で市域の約80%は山林原野である。大分県内では大分市、別府市に次いで人口が3番目に多い都市である。城下町で、青の洞門、羅漢寺、福澤諭吉旧居、中津城などの文化財や歴史的建造物、市域南部には景勝地の耶馬溪がある観光都市である。天草市は、平成18年3月27日に2市8町で合併し誕生した街です。

○ 事業の概要

地域医療の問題の解消を目指し、周辺の自治体と共に広域での取り組みを進める医療圏。更に、通勤・通学圏、商業圏等の状況を踏まえ、大分県の宇佐市、豊後高田市、福岡県の豊前市、築上町、上毛町とH21年に協定を締結し「九州周防灘地域定住自立圏」を形成した。これにより、圏域内に存在する公共施設の相互利用、それらの有機的な結びつきによるサービスの向上、また、各自治体で実施されている公共サービスの共同実施や相互補完、協力体制の整備など、圏域住民の利便性の向上を目指している。

地方では急速な高齢化により交通弱者が増加し、通院や買い物など生活に必要な交通網の整備が喫緊な課題であり、そのためには、行政区域を越えた、実際の生活実態に則した路線の整備が必要である。生活圏を中津市（大分県）に求める豊前市（福岡県）では医療の拠点が中津市民病院となっていた。高齢者にとって往復路の電車、バスの乗り換えは身体的負担が重くタクシーに頼らざるを得なかった。豊前市から中津市民病院へのアクセスを整備するため県境を越えた豊前中津線コミュニティバスを共同事業として実施することにより住民の実生活に則した利便性が確保された。更に、65才以上の高齢者に対しては、高齢者チケットを購入することにより運賃補助を行い負担軽減を図っている。豊前市民にとって乗り継ぎの必要がなくなり利便性が向上して利用者が増加している。今後とも更なるPRに努め、利用者の声をできる限り反映させ、利用しやすい路線確保に努めていきたいとのことである。

大分県豊後高田市 観光まちづくり「昭和の町」について

○ 市の概要

豊後高田市は大分県北部の国東半島の北西部に位置し、周防灘に面する。市内中心部を二級河川の桂川等の川が流れる。中津市から車で30分、大分市から車で約1時間ほどの位置にあり、旧豊前国と豊後国のほぼ境界に位置する都市である。大分県北部に位置することから、生活面、文化面等で中津市・宇佐市・福岡県豊前市との関係が深い。経済的に

中津市を中心とする小規模経済圏の中津都市圏に属する。

域内には、瀬戸内海国立公園及び国東半島県立自然公園を擁し、山間部及び海岸部の自然景観や農村集落景観、六郷満山文化ゆかりの史跡等、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富です。

○ 事業の概要

事業目的は、商店街が最も栄えた「昭和30年代」をテーマに商業と観光の一体化により商店街の魅力を高め活性化を目指すものである。

戦時中も戦災に会わなかった事で、商店街の建物の7割が昭和30年代以前に建てられたままであり、少しの手直しで「昭和の店」が展開し「昭和のまち」ができる事にも恵まれていた。また、商業者、商工会議所、行政の三者で構成された「豊後高田市商業まちづくり委員会」が立ち上げられ、この委員会が中心となり、まちぐるみの取り組みが相乗効果を生み、H13年は2万人がH15年に年間20万人を突破する「まち」となった。更に商店数の減少に歯止めを掛けると共に、100名を越える新たな雇用の創出が生まれるなど商店街の活性化に大きな波及効果をもたらす事業となった。

この一連の流れを、観光客の推移の数値で確認すれば、H13年 25,712人、H19年 361,320人をピークにH22年でも329,968人とほぼ変化せず「昭和のまち」ブランド力の成功が数字上成果において現れている。

しかし、これを一過性のブームか単なるイベントで終わらせないためには、智恵を集めた第二、第三の奇跡を起こしていかなければならないだろう。



終わりに、今回の行政視察を通じて、まちづくりは住民との協働がいかに大切であるかを痛感したことを付記したいと思います。

【生活産業委員会の視察を終えて 竹内 勝利】

生活産業委員会行政視察に福岡県春日市の九州大学応用力学研究所による、風エネルギーを集中させる革新的風力発電システム「レンズ風車」の開発実用的利用を目指している。

地球環境問題とエネルギー保全の問題を克服し、自然のエネルギーを適切に有効利用した術開発がされていた。「環境省委託事業」でもある。洋上浮体式エネルギーファームの開発にも力を入れている。再生可能エネルギーの開発が注目される中、太陽光・地熱・水力・潮力・風力といったエネルギー源を利用した複合的な発電システムを目指している。

また、海洋牧場・充電基地・漁業との共存・養殖生け簀など多目的利用を考えている。これからも研究、開発に力を入れ、再生可能エネルギー利用に取り組むべきだと思う。

次に大分県豊後高田市の「昭和の町」を視察しました。昭和の町とは総延長550mの通り沿いに点々と立ち並ぶ昭和の建物に足をとめ、昭和の時間とのふれあいの場所です。「駄菓子屋の夢博物館」駄菓子屋のおもちゃ六万点を展示した懐かしさあふれる博物館。

昭和を目と耳と体で感じることができる、「夢町二丁目館」「昭和の絵本美術館」くにさき半島の食材を味わえるレストランなどを視察してきました。今後の活動に生かしたいとおもいました。



【大分県中津市コミュニティバスの運行状況について 荒船 功】

秩父市議会生活産業委員会で「九州周防灘地域定住自立圏共生ビジョン」に基づくコミュニティバス運行状況について視察した。中津市は、大分県の最北端に位置し、福岡県の東部地区と隣接、平成17年3月に下毛郡4町村と合併し、人口は86,000人の都市です。中津市では、地域の中核病院である中津市民病院に関し、産婦人科が休診するなど医師不足が顕在化する問題の解消を目指し周辺の自治体と共に「中津市民病院広域医療圏対策研究協議会」を設立し、広域での取り組みを進めてきた。医療圏の取り組みに加えて、定住自立圏構想のもと、通勤・通学圏・商業圏等の状況をふまえて、大分県の宇佐市、豊後高田市、福岡県の豊前市、築上町、上毛町と、平成21年11月に協定を締結し「九州周防灘地域定住自立圏」を形成、圏域内に存在する公共施設の相互利用やそれらの有機的な結びつきによるサービスの向上、各自治体の協力体制を進めてきた。

圏域住民の生活利便性向上の事業として、福岡県豊前市と大分県中津市民病院を結ぶコミュニティバスの運行を平成22年4月に開始、病院への通院アクセスの整備による広域医療サービスの充実と両市の経済的連携強化を図った。背景には、急速な高齢化により交通弱者が増加しており、通院や買い物など生活に必要な交通網の整備が急務で、実際の生活に則した路線設定を柔軟に行うことが必要との観点から行政区を超えた連携が実現したとの説明なされた。豊前市民にとって乗り継ぎが解消され市民の利便性が向上、中津市では、中津市民病院への交通基盤が整備され利用者の増加が図られた。